



Ultimate Hunter-2

Original Story ザウス(本釀造)

Novelization 糸井健一

Original Illustration まさはる



第1章 幽霊船

5

第2章 王家の嘆き

55

第3章 ル・イーザの遺跡

99

第4章 封印の塔

137

第5章 時空を超えて

173

第6章 決戦の刻

229

エピローグ

253

第1章 幽靈船

前巻のあらすじ。

世界最高のアルティメットハンターと名高い俺、カインがあらゆる冒険に挑んでは、これを華麗に成し遂げ、強大な敵があらわれては、一撃で成敗する。

そして世界のあらゆる美女、美少女たちは、一目で俺に惚れて股間を濡らし、『カイン様、あたしを抱いて♡』と、身体を投げ出してくる始末。

はっはっはっ、お嬢さん、俺に惚れたらヤケドをするぜ。

おいおい、待てよ、俺の身体は一つしかないんだ、順番な、順番。大丈夫、世界最高のアルティメットハンターたる俺様は、並の体力や回復力じゃないんだぜ！

こうして俺は世界中の美女に囲まれ、幸せに暮らしましたとさ。
めでたし、めでたし……。

と、そんな……話だつたら、よかつたのになあ……。

「夢見ているところを悪いねえ」

ウワサによれば、かるく百歳を過ぎていていると言われる老婆の声が、俺を現実へと引き戻す。

「いや、単なる起きて見る夢だ、気にしないでくれ……」
ユーリに呼び戻された俺は、仲間とエリザベスばあさんの待つ我が家へと足早に戻つて
きた。

俺とばあさんを含めて十一人の大集団が、客間に集う。

「んもう、せまいつたらありやしないわ」

「あんたも居候だつてこと、忘れないでよね」

「何よ、ここはあたしとダーリンの愛の巣なのよ。お邪魔虫こそ、さつさと出て行きなさいよ」

「寝ぼけてるんじゃないわよ、ここはルーナくんの家なんだからね。ルーナくんがあんたを庇かばわなきや、さつさと追い出してるんだから」

「……話を続けていいかい？」

エリザベスばあさんが、申し訳なさそうに口をはさむ。

「気にしないで続けてくれ、一時間に一回は繰り返される、いつものことだ」

「仲悪そうに見えますけどお、実はエレナ姉さまとミーシャ姉さまって、とっても仲がいいんですよ。だから大丈夫です」

「相思相愛つて奴ですな」

「だれが、こんな奴と（×2）」

ルーナとカエデの言葉に、声を重ねてつっこむ一人。ホントに仲いいな、お前ら……。
「で、ばあさん、なんで俺らなんだ。港には海賊船団だって相手にできる、港湾警備隊も
いるだろう」

俺は強引に話を引き戻す。

「もちろん最初に行つたさ」

ばあさんの表情が、厳しいものへと変わる。

「今頃は、幽霊船に返り討ちにあつている頃だろうねえ。あたしの言うことを聞かなかつ
たバチが当たつたんだよ」

「そんなまさか……精銳で謳うたわれた港湾警備隊よ、装備や隊員の熟練度なら、海軍にだつ
て引けを取らないわ」

エレナがばあさんの吐き捨てるような言葉に反論する。だが言葉を返したのは、ばあさ
んではなくフローラだった。

「エレナさん、いかに熟練の剣士でも、幽霊相手に剣は効かないわ。それと一緒になのよ。
高レベルの魔術師や神官が同行しているなら別だけど、力業じやあ幽霊の類には勝てないわ」
「そういうことじや、港湾警備隊には期待をせん方がいい。もう幽霊船は港の目と鼻の先、
今から魔術師や神官を集めて、あの幽霊船を沈めるのは不可能じやな」
「だから直接、幽霊船の中に乗り込んでその元凶を断つ……か？」

「いや、それも難しい。強力な怨念は新たな怨念を呼ぶ、あそこまで膨れあがった怨念を封じるのは、容易なことじやない」

「なら、俺たちにどうしろっていうんだ、ばあさん？」

「これじやよ」

ばあさんは懐から、数枚の紙切れを取り出す。

それは何やら、俺には理解できない文字の書かれたお札だった。

「魔封じの札ですな」

それまで、ポーッと話を聞いていてカエデが、ぴょこっとテーブルに顔を出す。

「おや、お嬢ちゃん、物知りだねえ」

「それがしの国では、割と見かけるものですから」

「なら話は早いね、これはゴーストの類の活動を一時的に押さえつけるお札だよ。根本的な対策は後で考えるとして、これで元凶となる靈を封じてきて欲しいんじや」

「応急処置つてわけか」

「そうじやな、そもそも幽霊船が港に突っ込んでくる理由がわからん。一時しのぎしか打つ手がないんじやよ」

「違いない」

「ギルドが壊滅して以降、他のハンターたちは連絡がとれん。おぬしたちだけが頼りな

んじゃ。頼むから引き受けてくれんか?」

「ご主人様あ……」

「ばあさんだけではなく、ルーナまでもが懇願するような目で俺を見上げる。

「安心しろルーナ、お前の好きな街を壊させはしないさ。ばあさん、船の手配は?」

「ルーナとばあさんの表情がほころぶ。

「おお、やつてくれるのかい。もちろんとつくにできどるよ」

「よし、時間が惜しい、早速、幽霊船へと乗り込もう……いや、ちょっと待った!」

「? どうしたのよ、カイン」

「乗り気になつていた一同が、怪訝そうな目で俺を見る。

「とても封じきれない怨霊を相手に、大人数で乗り込んでも意味はないだろう。それに狭い船内じやあお互いに足を引っ張りかねない。今回は思い切つて、最低限の人数で乗り込もう」

「それでもし、しくじつたらどうするのよ?」

セフィーが詰問するように問いかけてくる。

「だから、なおさら待機要員が必要なんだよ。セフィーとフローラは港で待機していくく
れ。最悪の場合は……一人の魔法による時間稼ぎが頼りだ。今回、一緒に行つてもらうメ
ンバーは……エレナ、ユーリ……」

セリカは……本人の話では、多少の神官魔法が使えるとのことだ。魔法による支援がない以上、本来なら同行してもらいたい所だが……。

一瞬、俺とセリカの視線が絡む。が、つい俺の方から視線を外してしまった。

「それと俺の三人で……」

「待って下さい、カイン様！」

テーブル脇の椅子に座っていたセリカが、立ち上がりつて身を乗り出す。
「私でお役に立てるのでしたら、是非、同行させて下さい！」

「しかしセリカ……」

「カイン様のお心遣い、大変ありがとうございます。ですが、私の身を案じてのことでしたら、そのお心遣いは無用に願います」

「どうやら、視線の意味を悟られたらしい……。
「わかった、セリカも同行してもらおう」

「それがしは……」

「カエデは待機だ」

「あう、〇・五秒もかからず、即断ですか……。でも、暗がりでの接近戦ならば、それがしの得意といったす所ですが？」

「朽ちかけた船内で、床を踏み抜いて落ちない自信あるのか？ 落ちるだけ落ちたら、下

は海だぞ

たらーっと、一筋の冷や汗を流すカエデ……。

「……み、港で待機しています……」

エリザベスばあさんの用意した小型艇に乗り、俺たちは幽霊船へと近づき、乗り込んだ。ばあさんの言葉通り、港湾警備隊はわずかな時間に甚大な被害を受け、さつさと撤退したという。

しかし俺たちは、ここまで幽霊船からまったく妨害を受けていない。まるで招き入れるかのようなその態度が、かえって不気味だ……。

「呆れるほどの大きさだな……」

甲板に乗つて辺りを見回す。

こんな規模の船舶は、おそらく世界にも数隻しかないだろう……。

「きっと幽霊船になる前は、超豪華客船だったのね。まあ、あたしたちみたいなハンターには、一生、縁がないでしょうけど……」

こんな客船にまともに乗ろうとしたら、それこそ天文学的数字の金銭を要求されることだろう。

「違いない」

「師匠、あれを……」

ユーリが甲板の中ほどを指さす。そこには船室への入り口があり、先ほどまで閉じていた扉が、いつの間にか大きく開かれていた。

「やはり招かれている、か……」

扉に向かおうとした俺を、エレナが制する。

「ちょっとカイン、バカ正直にあそこから入るのは危険よ。他の出入り口を……」

「いや、無駄だろう。おそらく他の扉は固く閉ざされているか、無数の亡者たちが待機しているってことだろうな。相手の懷に飛び込んだんだ、これくらいの不利はしかたないさ」
俺たちはあらためて今回の任務の困難さを感じ、押し黙る。

問題はこの船の主が、なぜ俺たちを招いているかってことだが……。

俺は先頭に立ち、注意しながら扉に近づいて中をのぞき込む。薄暗闇の奥からは物音こそしないものの、得体の知れない強大なプレッシャーが発されている……。

背筋に冷たいものが走る。だが、いつまでも眺めているわけにはいかない。幽霊船は、もう港まですぐという所に近づいているのだ。

「さて、ここからは陽の光が届かない、亡者たちの領域だ。肉体を持つゾンビならともかく、靈体には俺たちの攻撃は効かない。敵が出ても一気に突つ切るぞ」

「そうね、それが正解だわ」

「でも師匠、この広い船内のどこに行けば……」

「心配するな、きっと俺たちを招いている奴が道を教えてくれるさ」

薄暗い船内の通路を進む。案の定、船の主は俺たちを招き入れたいらしく、正解コースを進んでいるうちは一切の妨害はないが、一步でもコースから外れると、途端に無数の亡者たちに襲われ、強制的にコースへと戻されてしまう。

出来の悪いゲームだな、これは……。

「カイン……気づいてる？」

エレナが皆に聞こえないよう、小声で問いかけてくる。

「ああ、退路には亡者の気配がびっしりだな……。もう行けるここまで行くしかない」

「なんか絶望的な状況よね……」

「いや、殺す気ならとっくにそうしているはずだ。こんな手の込んだ真似をするってのは、少なくとも用が済むまでは、殺す気はないってことだろう」

相手の考えがわからないってのが、ほんのちょっと致命的だが……。

亡者の案内に従い、俺たちは足早に通路を進む。そして程なくして、両開きの一際立派

な扉の前にたどり着いた。

「『多機能ホール』って書かれているわね」

「扉の向こうから……とても強い“想い”を感じます」

「俺たちが扉の前にたどり着くと、扉は音もなく開かれる。

「中に入れつて……ことなんだろうな」

「師匠、入るんですか？」

「そうしなきや、始まらねえだろ。時間的に見て、この船はそろそろ港の入り口にたどり着く頃だ。躊躇つてる余裕はねえ」

「そうですね……」

「心配するな、ここまで呼び寄せたんだ、いきなり殺しはしないさ」

「はいっ！」

意を決して扉をくぐった瞬間、軽い目眩を覚える。

そして目の前に広がった光景は……。

「な、なによ、これ……」

「ダンスパーティ……ですか？」

そこは豪奢なホールの中で、着飾った紳士、淑女たちが踊るダンスパーティの真っ最中だった。

「幻覚……か？」

「あ、ごめんなさい……あれ？」

呆気にとられるセリカに、グラスの乗ったトレイを運ぶボーイがぶつかる。だが、ボーイは何事もなかつたかのように、セリカを通り抜けてしまつた。

「あ、エレナさん！」

「何？」

「あの人、見て下さい!?」

ユーリが指さした先には、一際、高価そうなドレスを着飾つたエレナの姿があつた。

「な、何であたしが？」

「いや、ちょっと待てエレナ。あれはよく似ているが別人だろう。お前より少しだけだが

年齢が高いようだし、何より高貴さが違う。むしろ雰囲気的にはセリカの方に……」

『だんつ！』

「うあっ!!

右足に激痛が走る。

「余計なお世話よ！」



そういうところが違うんだっての……。

「でも、本当に今のエレナさんにあと数年の時間を足すと、の方とそつくりになられるんでしようね」

エレナとよく似た女は、人の良さそうな表情をした男と談笑している。互いに向ける親しげな表情、そして薬指に填められたお揃いのリングから、二人は夫婦なのだろうと窺える。「幸せそうですね……」

どこか憧れの混じったセリカの声。

「そうだな……。だか、見せたいのはこんな物のはずがない……」

突如、ホール内の灯りが消える。

「し、師匠！」

「落ち着け、これは只の幻覚だ」

再びガス灯に灯りがともつた時、ダンスホールはレザーアーマーに身を包んだ剣士たちに包囲されていた。全員が同じ装備の所をみると、どこかの兵士なのだろう。

兵士たちの足下には、無抵抗のまま殺されたのであろう、無数の死体が転がる。

「きやああ！」

「セ、セリカ！ 落ち着いて！」

「こいつらは……」